

日蓮大聖人御書全集

あきもとどのごへんじ

秋元殿御返事

新版
1455
〜
1456

秋元殿御返事

ぶんえい ねん がつ にち さい あきもとどの

文永 8 年 ('71) 1 月 11 日 50 歳 秋元殿

おんふみくわ うけたまわ そうら お

御文委しく承り候い畢わんぬ。

おんふみ い まっぼう はじ ごひやくねん ほう ひろ

御文に云わく「末法の始め五百年にはいかなる法を弘む

おも そうら しょうにん おお うけたまわ そうら

べしと思いまいらせ候いしに、聖人の仰せを承り候

ほけきよう だいもく かぎ ひろ よしちようもんもう みでし

に、法華経の題目に限って弘むべき由聴聞申して、御弟子

いちぶん さだ そうらう こと ごせつく ゆらい

の一分に定まり候。殊に五節供はいかなる由来、いかな

しよひよう なに しょうい 祭 そうらう そうらう

る所表、何をもつて正意としてまつり候べく候や」

うんぬん

云々。

夫れ、このことは日蓮委しく知るしことなし。しかりとい

えども、ほぼ意得て候。根本大師の御相承ありげに候。

総じて真言・天台兩宗の習いなり。委しくは曾谷殿へ申し

て候。次いでごせつくの御時は御談合あるべきか。

まず、五節供の次第を案ずるに、妙法蓮華經の五字の

次第の祭りなり。正月は妙の一字のまつり、天照太神を歳

の神とす。三月三日は法の一字のまつりなり。辰をもつて神

とす。五月五日は蓮の一字のまつりなり。午をもつて神とす。

七月七日は華の一字の祭りなり。申をもつて神とす。九月

こののか きょう いちじ

いぬ かみ

九日は経の一字のまつり、戌をもつて神とす。かくのごと

こころえ なんみようほうれんげきよう とな たま げんぜあんのん

く心得て、南無妙法蓮華経と唱えさせ給え。「現世安穩にし

のち ぜんしよ しよう うたが

て、後に善処に生ず」疑いなかるべし。

ほけきよう きようじや いっさい してん ふたい しゆご きようもん

法華経の行者をば、一切の諸天、不退に守護すべき经文

ふんみよう きよう だいご い してん ちゆうや つね ほう

分明なり。経の第五に云わく「諸天は昼夜に、常に法の

ゆえ えご うんぬん てん

ための故に、しかもこれを衛護す」云々。また云わく「天の

もろもろ どうじ きゆうし とうじよう くわ どく

諸の童子は、もつて給使をなさん。刀杖も加えず、毒も

がい あた うんぬん してん ぼんでん たいしやく にちがつ

害すること能わじ」云々。「諸天」とは梵天・帝釈・日月・

しだいてんのうとう ほう ほけきよう どうじ しちよう

四大天王等なり。「法」とは法華経なり。「童子」とは七曜・

にじゅうはつしゆく まりしてんとう

りんぴやうとうじゃかいじんれつぎいぜん

二十八宿・摩利支天等なり。「臨兵闘者皆陣列在前」、こ

とうじやうふか しじ

ずいぶん そうでん

れまた「刀杖不加」の四字なり。これらは随分の相伝なり。

よ よ あん たも

だいろく

い

いつさいせけん

ちせい

能く能く案じ給うべし。第六に云わく「一切世間の治生

さんぎやう

みなじつそう

あいいはい

うんぬん

ごせつく

とき

産業は、皆実相と相違背せず」云々。五節供の時もただ

なんみやうほうれんげきやう

とな

しつじじやうじゆ

たま

いさい

南無妙法蓮華経と唱えて悉地成就せしめ給え。委細はまた

もう

そうろう

また申すべく候。

つぎ

ほけきやう

まつぼう

はじ

ごひやくねん

ひろ

たも

次に「法華経は末法の始め五百年に弘まり給うべきと

ちやうもんつかまつ

みでし

おお

そうろう

聴聞 仕り、御弟子となる」と仰せ候こと。

しだん

さんぜ

ちぎ

しゆ

じゆく

だつ

さんやくべつ

ひと

師檀となることは三世の契り、種・熟・脱の三益別に人を

もと しょうぶつ ぶつ ね し しょう

求めんや。「いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生

ほつし しんごん すみ ぼだい どう え し

ず」「もし法師に親近せば、速やかに菩提の道を得、この師に

ずいじゆん がく ごうしゃ ほとけ み え

随順して学せば、恒沙の仏を見たてまつることを得ん」の

きんげんたが だいばほん い しょう ところ

金言違うべきや。提婆品に云う「生ずるところの処にて、

つね きよう き ひと きへん

常にこの経を聞かん」の人は、あに貴辺にあらずや。その

ゆえ つぎかみ みらいせ なか ぜんなんし ぜんによにんあ

故は、次上に「未来世の中に、もし善男子・善女人有つて」

み ぜんなんし ほけきよう たも ぞく

と見えたり。善男子とは法華経を持つ俗のことなり。いよ

しんじん たも きようきよう

いよ信心をいたし給うべし、信心をいたし給うべし。恐々

きんげん

謹言。

しょうがつじゅういちにち

正月十一日

あきもとどのごへんじ

秋元殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押

あわのくに保田

安房国ほたより出だす。

い